

「方言の島」山梨県奈良田の言語状況

小西いずみ

1. はじめに

本稿では、山梨県奈良田集落とその方言に関する社会言語学的・記述的研究の一端を記す。

冒頭から私事に及ぶことになるが、奈良田集落・奈良田方言と筆者との関わりをまず述べたい。筆者が奈良田集落を最初に訪れたのは、1998年、大学院生として在籍していた東京都立大学国語学研究室で実施された方言調査においてである。同年2回の共同調査後も、この方言の体系や言語環境に関心を持ち、単独で細々と調査・研究を続けていた。しかし、筆者自身の事情と中心的協力者（後述の話者 A）の逝去により、2007年以降は研究を中断していた。

2017年、国立国語研究所「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」プロジェクトの対象に奈良田方言が加わり、約10年ぶりに奈良田を訪れた。その後も現在まで研究を続けている⁽¹⁾。プロジェクトの課題以外に筆者個人の研究課題として、奈良田集落を一つの言語共同体（speech community）と捉え、その言語生活誌を編むことを目指している⁽²⁾。というのは、奈良田方言の話者は山梨方言の話者でもあり、その二方言併用のさまを含む奈良田の言語状況には、現代日本の地域社会と地域方言に通じる一般性と、奈良田固有の面が見られるからである。

本稿においても、奈良田方言の特徴とともに奈良田の言語状況を記す。2節で奈良田とその方言の近代史を、3節で奈良田方言の音韻・文法特徴を略述する。4節では、奈良田方言を特徴づけるアクセント体系とアクセント変化について、2000年頃の言語状況と関連づけながら記す。最後に5節で現在の奈良田の言語状況を述べる。

2. 奈良田集落と奈良田方言の近代

奈良田は、山梨県南巨摩郡早川町の北端の集落である。南アルプスの登山口にあたり、最近隣の集落は約10km南の^{かみゆじま}上湯島である。2015年国勢調査によると奈良田の人口は42名、内65歳以上が16名だが、この数には集落から離れた発電所の寮の居住者なども含まれており、集落の居住者はもっと少なく、高齢化率はさらに高いと推測される。

奈良田は、周囲と隔絶した地理・社会環境から「秘境」とされてきた⁽³⁾。長く集落内で婚姻関係を結んでおり、1950年代まで生業は焼畑、曲物作り、狩猟であった。史料で集落が確認できるのは室町期だが、集落には、孝謙天皇（在位749-758年）が滞在し、奈良田温泉で湯治したという伝説があり⁽⁴⁾、集落名やその言語特徴（特にアクセント）もこの伝説に関連づけて語られることがある。1950年代、早川流域の発電所建設事業開始を契機として、集落の環境が大きく変化した。道路が整備され路線バスが開通、また、元の集落にダムが作られることと

なり集落は数百メートル北東に移転した(1960年完了)。並行して男性の多くが発電所や早川町役場に勤務するようになり(他に数世帯が旅館・民宿経営)、焼畑は行われなくなった。西山小学校奈良田分校は1964年に廃校となった。高校への進学率が高くなり、子の高校進学時に甲府など他地域に移る世帯が増えていった⁽⁵⁾。

奈良田方言はその聴覚的な印象において周辺の山梨西部方言(国中方言。以下「山梨方言」と大きく異なる。そのため奈良田は「方言の島」ともされてきた。ただし、山梨方言と奈良田方言を区別する言語特徴は、単語アクセントであり、それ以外の音韻・文法的特徴の多くは山梨方言に準じる(清水・渡辺1958)。1998年の東京都立大学の共同調査時、すでに奈良田方言の話者は40代以上に限られていた(篠崎・荻野1999、小西2001)。

3. 音韻と文法

奈良田方言の音素の種類は現代日本語共通語と異ならないが、各音素の音声や音素配列には異なる点がある。以下、その主な特徴を挙げる。なお、アクセントについては次節で述べる。

- ・母音 /u/ は円唇 [u]。
- ・狭母音の無声化が東京方言に比べて起こりにくい。例：/kusi/ [kuci] (櫛)
- ・語頭の /e/ が [je~e] 例：[e~je] (絵、家)
- ・/s, z/ (サ・ザ行子音) は、後続 /e, a, u, o/ のとき [θ~s], [ð~ɬ~z], /i/ のとき [ç], [ɕ~z] である。特に後続が /u/ のときに歯間音 [θ], [ð] になりやすい。
- ・/t, c, d/ (タ・ダ行子音) は、後続 /e, a, o/ のとき [t], [d], /i/ のとき /c/ [tɕi], [ɕ~z], /u/ のとき [t~tʰ~ɕ], [d~dʰ~ɬ~z~ð]。[t], [d] は特に後続が /u/ のとき東京方言より後ろ寄り、そり舌ぎみ。
- ・前2項と関連して、/zu/ (ず) と /du/ (づ) の区別がある⁽⁶⁾。例：/zurui/ [ɖului] (狢い)、/nezumi/ [neɖumi] (鼠)、/dutu/ [dutu:] (頭痛)、/midu/ [mʲidu] (水) など(ただし5節参照)。
- ・共通語の /-(C)awa, (C)ae/ に対応して /-(C)aa/ [-(C)a:] 例：/kaa/ [ka:] (川・皮)、/nae/ [na:] (苗)

文法についても山梨方言と共通する面が多い(清水1957、清水・渡辺1958)。筆者らの調査で得た1・2人称代名詞の体系を表1に示し、格と述語形式の特徴および例文(1~14)を示す⁽⁷⁾。

- ・主格は =na(ガ) のほか、2人称オイシなどで限定的に =no(ノ)。主題主語は =wa。[例1、2]
- ・対格は =o(オ)、または名詞末母音を長音化する(名詞末 /i, e/ のとき /..Cjoo/)。主題目的語は =wa(ワ) 単独のほか、対格(オか長音)に =wa が付くことがある。[例1~4]
- ・授与の受け手は =ni(ニ)、移動の方向や着点にあたる無生名詞は =ni, e(エ), i(イ), sa(サ)。=sa は前接名詞が長音(稀に撥音や二重母音 ai) の場合のみに用いられる。[例3、5、6]

- ・ 属格は =no (ノ) と =ŋa (ガ)。=ŋa は修飾名詞が有生物、主に人の場合に制限される。人名詞であっても、2人称代名詞のうちワレとウヌは =ŋa が優勢、オイシは =no が優勢、親族名詞のうち兄弟姉妹は =ŋa が優勢、父母は =no が優勢など、上下関係も要因となる。=ŋa は所有関係を表すときに用いやすく、「姉の花子」(姉である花子) など属性を表す場合は不適格⁽⁸⁾。[例7～11]
- ・ 動詞の否定形は -noo (ノー) か -N (ン)。[例12]
- ・ 過去形は -too (トー) か -ta (タ) となる。[例1～3など]
- ・ コピュラは =doo (ドー) か =da (ダ) である。[例11]
- ・ 推量形は =ra (ラ) (動詞・形容詞)、=dura (ヅラ) (名詞・動詞・形容詞)。動詞・形容詞に =dura が付く形は、本来は「～のだろう」に対応するが、「～だろう」に対応する発話も得ている。[例13]
- ・ s 語幹(サ行) 動詞に -te や -too/ta が付くとき、いわゆるイ音便形をとる。これは奈良田にあって山梨方言に確認できない代表的な文法特徴である。[例14]

表1 奈良田方言の人称代名詞 (表音的カタカナ、形態素境界を付した音素表記を併記)

	単数	複数
1人称	オレ /ore/ ウラ /ura/ ^注	ウラ /ura/ ウラ {ガ・ン} トー /ura- {ŋa, n} too/
2人称 中立～丁寧	オイシ /oisi/	オンダチ /ondaci/
2人称 ぞんざい	ワレ /ware/	ワイラ /waira/ ワレ {ガ・ン} トー /ware- {ŋa, n} too/
2人称 罵倒	ウヌ /unu/	ウヌイラ /unuiru/

注：/ura/ は本来は複数形だが単数形として用いられることがある。

- (1) talo:ŋa omotea: bukkowaito:ni
太郎 =NOM おもちゃ.ACC 打ち壊す -PST=SFP (太郎がおもちゃを壊したよ)
- (2) ano kaɕo:wa oicino kutto:ka
あの 菓子 .ACC=TOP 2 sg=NOM 食う -PST=Q
(あの菓子はあなたが食べたのか)
- (3) talo:wa cate:ni ðenio {okutto: / okutta}
太郎 =TOP 弟 =DAT 金 =ACC 送る -PST (太郎は弟に金を送った)
- (4) θak^ho: nonde:lujo
酒 .ACC 飲む -PRG=SFP (酒を飲んでいるよ)
- (5) kabeni toke:ŋa kakatte:lujni
壁 =DAT 時計 =NOM かかる -PRG=SFP (壁に時計がかかっているよ)
- (6) {ka:e / ka:θa} itto:
川 =ALL 行く -PST (川へ行った)

- (7) waleŋa aŋi:ka
 2 sg=GEN 兄 = Q (お前の兄か?)
- (8) oiçino φukuwa dokode katto:
 2 sg=GEN 服 =TOP どこ =LOC 買う -PST (あなたの服はどこで買った?)
- (9) ane:ŋa tewa ikaina:
 姉 =GEN 手 =TOP 大きい =SFP (姉さんの手は大きいな)
- (10) ano je: {no / *ŋa} mado
 あの 家 =GEN 窓 (あの家の窓)
- (11) koleŋa ane: {no / *ŋa} hanako {doo / da} jo
 これ =NOM 姉 =GEN 花子 =COP=SFP (これは姉の花子だよ)
- (12) teŋam^o: {kakano:jo / kakaïjo}
 手紙 .ACC 書く -NEG=SFP (手紙を書かないよ)
- (13) hanakomo θono baŋŋum^oio {mⁱilula: / mⁱiluðula:}
 花子 =ADD その 番組 =ACC 見る =INFR
 (花子もその 番組を {見るだろう/見るのだろう})
- (14) kodomo: okoito:
 子ども .ACC 起こす -PST (子供を起こした)

4. アクセント体系と変化および方言併用状況

奈良田方言が「方言の島」として山梨方言と区別されるのは、アクセントによる。表2に2拍名詞の音調を示す。[でピッチの上昇、] でピッチの下降を表す。

表2 奈良田方言と共通語・東京方言・山梨方言における2拍名詞の音調

	奈良田方言			共通語・東京方言・山梨方言				
口	[ク]チ。	[ク]チガ	イカ[イ。	[コ]ノクチガ。	ク[チ。	ク[チガ	オーキ]ー。	コ[ノクチガ。
鼻	[ハ]ナ。	[ハ]ナガ	イカ[イ。	[コ]ノハナガ。	ハ[ナ。	ハ[ナガ	オーキ]ー。	コ[ノハナガ。
帯	オ[ビ。	オ[ビ]ガ	ミジカ[イ。	[コ]ノオ[ビ]ガ。	[オ]ビ。	[オ]ビガ	ミジカ]イ。	コ[ノオ]ビガ。
雨	ア[メ。	ア[メ]ガ	フル。	[コ]ノア[メ]ガ。	[ア]メ。	[ア]メガ	フル。	コ[ノア]メガ。
石	[イ]シ。	[イ]シ[ガ]	カタイ。	[コ]ノイシ[ガ。	イ[シ。	イ[シ]ガ	カタイ。	コ[ノイシ]ガ。
花	[ハ]ナ。	[ハ]ナ[ガ]	サク。	[コ]ノハナ[ガ。	ハ[ナ。	ハ[ナ]ガ	サク。	コ[ノハナ]ガ。

共通語・東京方言・山梨方言のアクセントは、①n拍語にn+1個のアクセント型があり、②単語ごとに下降の有無・位置が決まっている、と解される。表2の「口」「鼻」は0型(下降なし)、「帯」「雨」は1型(1拍目後に下降)、「石」「花」は2型(2拍目後に下降)となる。山梨方言は、基本的に東京方言と同じアクセント体系を持ち、各語のアクセント型も同じ場合が多いが、異なる語もある(東京方言の古いアクセント特徴を保つ場合が多い)。例えば「雲」(東京1型/山梨2型;以下同様)、「姉」(0型/1型)、「命」(1型/2型)、「取り出す」(0,

3型／1型) など。

奈良田方言のアクセントは、① n 拍語に n+1 個のアクセント型があり、② 単語ごとに上昇の有無・位置が決まっている、と解される(上野1975、1976、1984)。奈良田方言のアクセント(上げ核)の位置は、共通語・東京方言・山梨方言のアクセント(下げ核)の位置にほぼ対応する。特に山梨方言と対応することが多く、上掲の「姉」など共通語・東京方言と山梨方言とで核の位置が違う語において、奈良田方言では [ク]モ[ガ] (雲が、2型) など、山梨方言の下げ核と同じ位置に上げ核が位置する。こうした特徴もふまえ、奈良田方言アクセントは山梨方言アクセントから変化して成立したと考えられている(稲垣1957、上野2011)⁽⁹⁾。

奈良田住民は、奈良田方言と山梨方言の二方言併用 (bidialectal) 話者である。この二つの方言はアクセントによって区別され、他の音韻・語彙・文法特徴は連続的である。ここで「山梨方言」とする変種は、これを「標準語」と呼ぶ住民もあるが、アクセントも含めて基本的に山梨方言の特徴を持ち、また、話者も近隣地域との接触によって習得したと認識している。2000年頃は、奈良田方言話者どうしでは奈良田方言を使い、他地域に出た時や奈良田方言を解さない者に対して山梨方言を使っていた(小西2001。現在の状況は後述)。一つの発話単位内のコード混合 (code-mixing) はほとんど生じず、聞き手・場面に応じて選択される。

小西(2001)は、山梨西部でアクセントの共通語化が進むと、奈良田方言話者による山梨方言にも反映され、さらに奈良田方言にも多少遅れて反映されていることを見出した。「雲」を例にこの過程を下に示す。[] 内の数字はアクセント型だが、山梨方言は下げ核、奈良田方言は上げ核であることに注意されたい。

	山梨方言	奈良田方言	
段階1	ク[モ]ガ° [2]	[ク]モ[ガ°] [2]	(従来の山梨方言、奈良田方言)
段階2	[ク]モガ [1]	[ク]モ[ガ] [2]	(山梨方言のアクセント型が共通語化した状態)
段階3	[ク]モガ° [1]	ク[モ]ガ° [1]	(奈良田方言でもアクセント型が変化した状態)

こうした山梨方言と奈良田方言との間のアクセント型の連動は、奈良田方言アクセント成立以来、繰り返されてきたのではないかと、核の位置の鏡像関係を保つことで二方言併用を容易にしてきたのではないかと考えられる⁽¹⁰⁾。

5. 奈良田集落と奈良田方言の現在

現在、奈良田にはこの地にルーツのない若い家族が移住し、数十年ぶりに子供が住む地となった。かつて筆者が訪れていた2000年前後より活気があるようにも映る。一方、奈良田方言の衰退はさらに進んでいる。2020年現在、奈良田方言話者は20年前より確実に減り、筆者らの研究に協力いただける話者は数名である。20年前には、奈良田生え抜きの人のどうしでは奈良田方言が使われていたが、話者B(1934年生・男性)の一人によると、現在は奈良田生え抜き

の人どうしても使わないという⁽¹¹⁾。筆者らの調査で得る発話はすでに活きた言語ではないと言える。また、20年前には二方言併用話者だった複数名が現在は奈良田方言への切替が困難である。皮肉なことに、奈良田方言と山梨方言のアクセントの鏡像関係と、それにもとづく奈良田の人の二方言併用能力が、その方言の衰退を促進させたと言える。この点で奈良田方言の危機的状況には特異な面がある。

個々の言語特徴において奈良田方言がどのように変化してきたかは詳しく検証する必要があるが、分かっていることを概述しておく。まず、他方言と同様、固有の語彙はかなり失われている。調査者からの語形の提示で思い出すことが多く、思い出しても意味が不明確なこともある。生活の変化により語の指示対象自体に接しないものもあるが⁽¹²⁾、デカス(作る)、セク[°](止める)、カタル(結婚する)など、基礎動詞で現在の話者が使用語彙でないとする語も少なくない。このうちデカスは20年前の調査の話者A(1917年生・男性)は使用しており、この2世代間で衰退が進んだことが分かる。

音韻面でも、話者Aと話者B・C・D(1930年代生)とで異なる点がある。顕著なのは/tu, du/の音声、および/zu/と/du/の対立である。話者Aは、/tu, du/がそり舌気味・後ろ寄りの[tu, du]、/zu/が[ðu~zu~ɬu]で、/zu/と/du/は明確に対立していた。話者B・C・Dでは、/tu/ [tu~tsu]、/du/ [du~ɬu~zu~ðu]、/zu/ [ðu~zu~ɬu]と、/tu, du/の破擦化が進み、[miðu] (水)など本来/du/の語が[ðu]となる発話も多い⁽¹³⁾。しかし、単語のアクセント型はよく保持されている。「昔使った」と内省される語も含め、ヅコー[0型](拳)、ヒジロ[2型](囲炉裏)、オーチ[0型](垣根)など、上野(1977, 1981)の記述とも話者どうしても一致する。

文法的な特徴についても、山梨方言にない特徴も含め、よく維持されている。例えば属格にはガとノがあり前者には意味的制限があるが、そのガの制限も含めて話者AとB・Cの間で基本的に等しい文法を持つ。「ダイタ・ダイトー」(出した)などサ行(s語幹)動詞がイ音便をとる点も話者B~Dに見られる。ただしサ行動詞にはイ音便形が許容されない動詞があるが(小西2002)、その内訳や音韻的要因が話者Aと話者B~Dで一致するかは未確認である。

上述のとおり、奈良田方言を母方言とする話者がそれを今の日常生活で使用しなくなっており、また若い世代の話者がいないという点で、奈良田方言はきわめて危機的な状況にあるが、それに至る過程においても、上で見たように比較的維持されやすい特徴と失われやすい特徴がある。奈良田方言の記述・記録とともに、危機的言語変種において維持されやすい特徴とそうでない特徴との間にどのような言語内的・外的要因が見られるのかの検討も、今後の課題となる。

註

- (1) 三樹陽介(駒澤大学)、吉田雅子(実践女子大学)との共同研究である。2020年はコロナ禍により臨地調査が行えず、オンラインでの面接質問調査を行っている。
- (2) Hymes(1974)が“ethnography of communication”と呼ぶものに近いが、奈良田住民が集落や自らの言語環境をどのように捉えているか、それが方言に対する態度やアイデンティティにどのように結びついているかといった点も含む。
- (3) 『西山村総合調査報告書』(西山村総合学術調査団1958)の巻頭に寄せられた、当時の山梨県知事らの序文にも「甲斐の秘境」「桃源郷」などの表現が用いられている。また、奈良田住民で早川町職員であった深沢正志氏の単著は『秘境・奈良田』と題される。
- (4) 孝謙天皇滞在の伝説は、奈良田にある外良寺略縁記(成立年代未詳)に記載があるもので、明治20年代には外良寺の住職・志村孝学が『更許孝謙天皇御遷居縁起鈔』と題した冊子を編集して観光客に頒布しており、昭和期にもその簡約版現代語訳が作られたという(深沢1989)。
- (5) 以上の奈良田の近代史については西山村総合学術調査団(1958)、早川町教育委員会(1980)、深沢(1989)参照。
- (6) 柴田(1957)、清水(1958)は、/zi/と/di/も[zi],[dzi]で区別があるとするが、筆者の調査の段階でその区別は失われていた。
- (7) 例文は、1行めに簡略音声表記、2行めに語彙・文法形式のグロス(-で接辞境界、=で接語境界を表す)、2行目右側か3行めに共通語訳を記す。文法形式のグロスは「下地理則の研究室・方言グロスリスト」(<https://www.mshimoji.com/blank-12>)を参考に次のように定める。
1 [1人称]、2 [2人称]、sg [単数]、pl [複数]、ACC [対格]、ADD [累加]、ALL [向格]、COP [コピュラ]、CSL [理由]、DAT [与格]、GEN [属格]、INFR [推量]、NEG [否定]、NOM [主格]、PRG [継続]、PST [過去]、TOP [主題]、Q [疑問]、SFP [終助詞]、VOL [意志]
- (8) 属格=ŋaの意味的な制限は茨城県水海道方言(佐々木2004)など日本語のいくつかの方言に見られる。「姉の花子」のような属性関係が属格の典型的用法から所有関係から派生しにくいことはNikiforidou(1991)参照。
- (9) 奈良田住民は、奈良田方言のアクセントを、孝謙天皇滞在伝説に関連づけ、畿央のアクセントを継承するものと語ってきたようで、筆者は複数の住民からこの説を聞いている。
- (10) ただし、山梨方言における下降の位置と奈良田方言における上昇の位置が対応することを、奈良田の人々が明示的知識として持つことをうかがわせる言動には、筆者はこれまで接したことがない。核の位置の対応はあくまで心内の暗示的知識として存在している。
- (11) ただし、この話者は現在一人暮らしである。奈良田出身者どうしの夫婦の場合、夫婦間では奈良田方言を使っている可能性がある。この点は確認を要する。
- (12) 身体語彙の調査で、臓器の名称に及んだ際、話者(1934年生・男)は「マルト」という語形を自ら思い出しながらも、それがどの臓器を指すかは明確でなかった。調査者が深沢(1957)、上野(1977:8)にもとづき「心臓」ではないかと話者に伝えた。上野も示唆するように、こうした臓器を指す非漢語語形は典型的には猟の獲物となった動物の臓器を指して用いられたもので、話者は人の臓器には用いにくいと内省する。また、話者が語形を思い出したのも、幼少期に大人が獲物を解体したりそれを食べたりした経験をまず思い出し、そこから引き出されたものである。
- (13) ただし、本来/zu/である音節が[du]となる発話は今のところ得ていない。

参考文献、URL

- 稲垣正幸 (1957) 「奈良田方言のアクセント」 稲垣正幸・他 (編) 所収
稲垣正幸・清水茂夫・深沢正志 (編) (1957) 『奈良田の方言』 山梨民俗の会
上野善道 (1975) 「アクセント素の弁別的特徴」 『言語の科学』 6号
上野善道 (1976) 「奈良田アクセント素の所属語彙」 『文経論叢』 11 卷 3号 (文学篇 11)
上野善道 (1977) 「奈良田方言の基礎語彙」 『文経論叢』 12 卷 3号 (文学篇 12)
上野善道 (1981) 「奈良田方言の基礎語彙 (2)」 『金沢大学文学部論集 文学科篇』 1号
上野善道 (1984) 「新潟県村上方言のアクセント」 『金田一春彦博士古稀記念論文集 第二卷 言語学編』 三省堂
上野善道 (2011) 「「上げ核」の由来：奈良田アクセントの成立過程」 坂詰力治 (編) 『言語変化の分析と理論』 おうふう
小西いずみ (2001) 「奈良田方言アクセントの現在：東京式アクセントの習得・併用と従来アクセントの変化」 『人文学報』 320号
小西いずみ (2002) 「サ行動詞イ音便化の例外語について：山梨県奈良田方言の場合」 『山梨ことばの会会報』 12号
佐々木冠 (2004) 『水海道方言における格と文法関係』 くろしお出版
篠崎晃一・荻野綱男 (1999) 「消えゆく方言の島・奈良田の現在」 『日本語学』 18 卷 3号
清水茂夫 (1957) 「奈良田ことばの語法」 稲垣正幸・他 (編) 所収
清水茂夫・渡辺宦弘 (1958) 「西山村方言の語法」 西山村総合学術調査団 (編) 所収
西山村総合学術調査団 (編) (1958) 『西山村総合調査報告書』 山梨県教育委員会
早川町教育委員会 (編) (1980) 『早川町誌』 早川町誌編纂委員会
深沢正志 (1957) 「奈良田方言語彙」 稲垣正幸・他 (編) 所収
深沢正志 (1989) 『秘境・奈良田』 山梨ふるさと文庫
Hymes, Dell (1974) *Foundations in Sociolinguistics: An ethnographic Approach*. Pennsylvania : University of Pennsylvania Press. (唐須教光 (訳) 『ことばの民族誌：社会言語学の基礎』 紀伊国屋書店)
Nikiforidou, Kiki (1991) The meanings of genitive: a case study in semantic structure and semantic change. *Cognitive Linguistics*, 2(2).

付記：いつも奈良田の方言や歴史についてお教えくださり、筆者らの研究を支援して下さる奈良田の皆様へ深く御礼申し上げます。本稿は国立国語研究所「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」プロジェクト、JSPS 科研費 17K02777、19H01255、20H00015、20K20704 による成果である。